

陸士59期生の

シベリア抑留記

本橋 宏 陸士59

シベリア抑留は悲惨な歴史として記憶されている。私の話はやや例外としての記録であるかも知れない。

私達陸士59期生の航空士官候補生約千名は最早内地では飛行訓練が不可能なために昭和20年4月満洲の各飛行場に分散して操縦訓練を受ける事になった。

ドイツ製だが和製化した複葉練習機のユングマンで、4名1班の飛行班で飛行場の22中隊所属であった。終戦前ソ連軍の侵攻を受け22中隊は半分に分かれて退避する事になった。私達80名は、ハルビンでソ連軍の捕虜となり約300km歩いて移動し、シベリアに抑留される事になったのである。昭和23年に帰国できるまでのシベリア抑留生活を思い出してみる。

同じシベリア抑留でも場所と作業内容如何ではこれ程違うのか、と思われる程の違いがあった。先ず場所だがシベリアは実に広い。欧州に近い処に抑留された中隊から極寒の地帯まで実に広い。つまりロシア全土に散らばって抑留されたに近い。そこに5〜6名ず

つ分散された。

シベリアは流刑の地で欧州でドイツに降伏した地区の人々が強制移民となつてあらゆる階層の人達が職に就いていた。我々もそれらの技術屋と一緒に橋を作つたのである。所謂インテリ

で女性も立派に仕事していた。また女受刑者も多かつた。そして抑留された日本兵に対するロシア監視兵の態度が全く違うのも面白かつた。ロシア人の

犯罪人に対する監視は実に厳しいが、日本人の犯罪人と称する人達に対しては「おおらか」というか犯罪人扱いではなかつた。寧ろロシア人の犯罪人から遠ざける様な扱いで、力仕事はロシア人囚人に仕向けて扱つていた様であつた。またロシア人の女囚人に対しては、日本人抑留者に接触しない様に特に監視していた。女囚人は「病氣持ち」というのが理由とされていた様である。監視兵が、ロシア人の時にこれを強く感じたものであつた。抑留の最初の2年はシベリア鉄道の通称バム鉄道(シベリア鉄道のタイシエツトから

分岐する支線で間宮海峡の対岸まで延伸すると称せられていた)の建設工事に従事させられた。シベリアには白樺の大木は密林としてあるが堅木の太い樹は少ない。試運転時には良く徐行をしていたものである。つまり鉄道建設で大切な事は路盤の維持である。その

為、枕木にする太くて堅い古木を集める。集団農園コルホーズで堅木の収集を1カ月近くやらされた。此処には女受刑者達が多く参加させられ監視されていた。彼女達はすぐくゴツイ連中であつた。抑留時に怪我をする事がある。意図的といつては語弊があるが、怪我をするると入院させられて、実はその間良い休憩となつたものである。それと共にロシア語の会話が必要となり適当に覚えたものであつた。只面白かつた事は、シベリアはロシアの本国からの流刑地であり、不平分子が多かつた事である。特にドイツとの戦争で敗戦となつた地区の人々の話などを、女医や看護婦達とゆつくり会話すると次第に理解できたものであつた。

帰国前は国営農園ソフホーズに勤務となり、農園の機械化が進められていた。機械化の器具は各国製が入り交じつていた。機械器具ばかりでなく部品のタイヤなども各国製の物であつた。これを補修させられ纏めて作製させられたものであつた。ソフホーズは機械化で大農法が可能であり、それがないと収穫が不足する。農業が不作だつたロシアでは栄養失調で死亡した人が日露双方にあつたのではないかと

思う。夏の時期、成人男性は他の仕事が多く、男性が殆どいないので必然的に娘達のトラクター独り乗りが多くな

り、その助手をさせられる事も多かつた。油污れの作業服を着た娘達は遅し

く、広い農地を独り乗りの農作機が闊歩していた。農地は広く機械化が必須

だつた。

夜になると篝火を焚き、アコーデオ

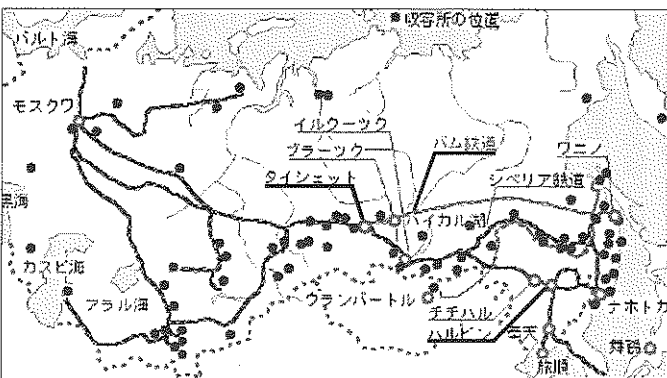
ンやその他の自前の楽器を鳴らし

て、老若男女が一同に集まり、キャン

プファイアーで騒いでいたものである。

こんな平和な光景も、シベリア抑留時にあつた事を記録に留めたい。

(予科29—1本科航襲)



関連地名 (出典: <https://ameblo.jp/akaeboshi/entry-11321658388.html>)